

鈴木翠軒

中島八十一

鈴木翠軒は書家なり。明治二十二年（西曆一八八九年）、愛知縣渥美郡堀切に生を受く。遠州灘に沿ひて濱名湖開口部より伊勢に向きて伸ぶる渥美半島は有史以前より太平洋の波濤を受け止めたればいささか内側に反り居たり。低き山の連なりを持つ洪積世臺地の波際は高さ約四十メートルの海食崖となり、NHK朝ドラ「エール」のオープニングに見る豊橋の典型風景として紹介せられし海岸こそこの片濱十三里ならぬ。

堀切は片濱十三里の端、渥美半島先端の伊良湖岬近きに位置する小さき村落なり。指呼の先に東大寺瓦窯跡あり、昭和四十一年に及びて半島に水を供給せんがための用水掘削に伴ひ登り窯と東大寺大佛殿瓦と陽刻したる瓦の出土見つ。これを奈良東大寺に保存せる古瓦と比ぶるに全くの一致見たれば、ここなるは焼成場なりしこと証せり。現にその地の字名を瓦場といひ、東大寺御用なりし傳承あるもその折まで實物見たる者なくして半信半疑の内に時を経たり。この一事以て、げに傳承輕んずべからずといふに足る。

そが瓦の一人一枚を背負ひて奈良まで運ぶにいつれの路を經由して畿内に至りし。伊良湖岬より伊勢方面を望めば三島由紀夫の潮騒の舞臺となりし神島（小説にては歌島）の眼前にありて、奥に志摩半島の山々連なり、奈良はこなたと指さすことも可ならん。最短なること疑ひもなければ、難關は最前衛の伊良湖水道なり。三河、尾張、美濃、伊勢の河川より流れ込む大量の水すべては幅一キロ餘の隘路を通り太平洋に流れ込み、その急流は海の三大難所となり、潮の引き際に現はれたる内海と太平洋を畫する一メートル餘の段差こそ低けれ、大瀧と聞こゆるナイアガラ、ビクトリアなども遠く及ばざる水量なり。にはかには信じ難きに、この水道に船を出し、瓦を抱いて渡りたりとぞ世に傳へらるる。

明治期に伊良湖岬に逗留したる柳田國男は漂着せる椰子の實を見、やがて島崎藤村に傳へたるにそのまま詩となり、昭和に至り大中寅二により樂曲に載せられ歌になれり。この濱に流れ着くは椰子の實のみならず。嵐の後、瑠璃貝や朝顔貝なる海上を漂う浮袋付けたる美しき青色の貝の濱一面に大量に打ち上ぐれば一帯を青く染むるなり。いづくの火山のものなるか輕石もまた常に多數見る。

堀切より東に目を轉ずれば、水少なき半島に唯一隣町の赤羽根に川ありて、外海に向きたる河口そのままを漁港として利用するあり。毎年梅雨の訪れ時、出産のため疊半疊ほどの巨大なる赤あかえいの數多く河口を遡上するに、禪一つの漁師が銛を構へこれを刺すさま正に勇壯なるものあり。六十年を遡りし話なり。

余は左利きなれば、文字を書くこと、箸を使うこと以外はすべて左手に任せ居る。両親の、多分に祖父の意向により、右利きに直さんがためには書道功あらんと由にて五歳より習字を始めたなり。

習字教室は幼稚園の教室を利用したれば通ふに便利なること此の上なし。まづは半紙を横に細長き八つ折にす、折り目に従ひて横一直線に一と曳く。毎度これより始むる作法にて、この一の羅列を中野と云ふ老教師に見せたり。記憶のあなたに見えし中野先生、おちいさんなるも余の今よりよほど若き年にてありたらむ。必ず一に朱の入りて、肘にて書くべしと指導續きたり。ゴルフにありて手打ちはいかん、野球投手の手投げ意味なしと同じ理窟なり、正確さとスピードまたは飛距離との關係に基づき双方の特性を兩立せしめずんば上手にはなり得ず、書字もまた成り立たず。園兒なりに小手先にてこねくり回すだけの字は書かざるべしと理解せり。園兒とてひらがなばかり習ひたるに、手本は青雲なる名のおよそ菊版大の月刊誌の中にあり。この手本、漢字は楷書、ひらがなは教科書體なるに書家鈴木翠軒の文字なること園兒いづれも知らじ。實はこの翠軒なる書家かつて習字の國定教科書をものしたり。

さて一年に一回、最高賞に翠軒賞を戴く競書展あり。そがために翠軒先生と母の常に言ひたればやうやう手本の主もまたすぬけんなるらしと氣附けり。この御仁わが郷里の英雄と知るはさらに後のことなり。翠軒の文字のうちにて印象に残りしはひらがなの「か」の筆法なり、かの點の部分は活字に見る點にあらずして、「く」を反轉したるが如くにてこれがこの書家の特徴なりけり。しかるにこれを眞似て書くこと甚だ難し。子供心に工夫を重ね、相當長き時間を掛けやうやく似せて書きつるに、果たして翠軒の眞の筆法いかなるか今なほ謎のまま残れり。

習字を始めてよりまる二年、留守宅に電話あり、小學一年の自分に翠軒賞授賞の速報なり。後日賞状とともに褒美の書が疊まれ届きたるに横に並べる二文字を誰も讀むことならず、離れ住みたる祖父を訪ひて問へば即座に「平靜」と讀みたり。

表装せられ、爾來六十有餘年、余とともにありけるこの平靜、翠軒が晩年の書風なる薄墨を用ひ草書で書かれたるに、その一畫、一畫に見る強靱なる筆遣ひは余をして今なほ唸らしむ。その一畫のしなり具合は肘で書くなどといふ技法をはるかに超え、天高く宇宙に擴げんとせし精神の發露そのものなり。それを視覺化したく思はば翠軒の肩甲骨周圍、肩、上肢に多くの電極張り付け、筋電圖を記録したらんには、運筆に連れて諸筋の次々に發火せる様最高の美として映るならん。草書を崩し字などと呼ぶはをこがましきこと限りなし。さあるに平靜とはいかやうなる文字の選擇かと怪しみたるも知る由なし。額の隅に、翠軒賞と余の名前の翠軒自筆の小さな紙片あり。

この受賞により右手を使ひ文字を書き得ること親に證したれば、余は習字より遠ざかり今日まで筆を持つことなし。扁額を見つつ、知らざる異界の存するを知るばかりなり。

(令和二年九月八日受附)